

## 野洲市大篠原地域環境保全対策委員会 令和元年度第1回会議結果

1. 開催日時 令和2年1月23日(木) 13時45分～15時45分
2. 開催場所 野洲クリーンセンター 2階研修室
3. 出席委員 市川委員長、岸本副委員長、橋本委員、橋委員、網野委員、飯田委員 以上6名  
※欠席委員なし
4. オブザーバー 滋賀県南部環境事務所 卯田所長
5. 事務局 遠藤環境経済部長、西村環境課長、原田環境課主任、  
中井野洲クリーンセンター所長、南井副所長、山藤専門員 以上6名  
野洲クリーンセンター運営事業者3名
6. 傍聴者 なし
7. 会議次第

1. 開会
2. あいさつ
3. 委員自己紹介
4. 委員長、副委員長の選任
5. 議事
  - (1) 地域内の環境負荷施設の取り組みについて
  - (2) ばいじん処理物の水銀の状況について
  - (3) 周辺河川等環境モニタリング調査結果及び令和2年度モニタリング計画について
  - (4) 野洲市災害廃棄物処理計画(案)について
6. その他
7. 閉会

### 8. 会議結果

#### 議事(1) 地域内の環境負荷施設の取り組みについて

##### ○意見、質疑等(・各委員 →市事務局)

- ・事業所Aは、排ガス中ダイオキシン類の報告のみで、他の事業所のように水質調査に関する報告がないが、→同事業所については、地下水に関しては現状、報告は提出されていない。
- ・地元自治会は、立地が一番上流にあり、危惧するところであるが、市との取り決め事項で、測定項目はないのか。  
→現状、ダイオキシン類のみである。
- ・協定書は、全社共通の様式ではないのか、あるいは各社ごとに違うのか。  
→大まかな部分では、全社一緒であるが、各社各々によって異なっているという状況である。
- ・A事業所の排ガス中ダイオキシン類調査では、平成22年度は、0.019ng-TEQ/m<sup>3</sup>N、平成29年度0.037ng-TEQ/m<sup>3</sup>N、平成30年度に至っては、0.37ng-TEQ/m<sup>3</sup>Nと、平成29年度・30年度対比で、10倍と高い上昇率と思うがどう考えるか。  
→例えば、平成27年度、平成28年度は、滋賀県による調査結果と事業所による自主調査結果とで一桁異なっており、測定条件によって大きく変わると考えられる。また、微量分析ということで、ナノグラム、10億分の1gという非常に小さい単位で変動しているものと考えている。

#### 議事(2) ばいじん処理物の水銀の状況について

- ・再発防止措置計画では、キレート薬剤添加率は10%と記載されているので、添加率は現在では変えることは困難な状況である。そのため10%を保ちながら、亜鉛系の溶剤を入れて対応している。今後、添加率を下げるためにクリタのS.sensing ASを使って実証するということだが、これは、ラボ試験で実施していくということか。  
→実際に野洲クリーンセンターの原灰をサンプリングしてそれを分析して、データをとっていく。現在、運営事業者が試運転する他の施設で水銀が問題となっている施設がある。野洲クリーンセンターの原灰中の水銀濃度が高い時とほぼ似ていると考えている。よって、実施設での検討結果を以って提案させていただく。
- ・S.sensing ASを用いて、まず最適なキレート剤の添加率パーセントを出し、次に実際の施設で実証試験を行い、本委員会に提案されるという手順か。  
→そういう流れでいきたい。
- ・了解した。これまで溶出防止の技術はなかなか無くて、実証する場もなかったが、今回、運営事業者が尽

力され、ここまで到達されたのは非常に良い形だと思う。

- ・原灰中の水銀濃度が野洲市において全国レベルでも少し高い。その点はどのように理解されているか。
- 水銀の関係は、従来のごみと分けて出していただくよう指導している。水銀の含有量の多い血圧計、さらに水銀の体温計、蛍光灯、ボタン電池については、学区ごとに回収ポストを設けている。ただ、ごみの中にボタン電池などが紛れ込む恐れは、完全に払拭できていないのが現実であり、さらに市民向けの啓発を推進し、水銀の毒性、危険性を訴えて、決められた回収ポストに投入されるよう周知徹底したい。
- 3年前のデータの平均 20.2 mg/kg が、最近の平均では 13.4 mg/kg と下がっており入口対策が見えている。ただ、時々、高い時もある。
- ・平均約 20 が 13 程度に下がったのは、対策が一定の功を奏していると思う。

### 議事(3) 周辺河川等環境モニタリング調査結果及び令和2年度モニタリング計画について

- ・クリーンセンターから川まで高低差があるので、地中を通して河川に流入するまでに地中でろ過されると考えられるのか、あるいは考えなくてもいいのか。
- 稲荷川については、三面張りされており、一応流出しないと考えられる。調査地点4の合流地点直前は、底が打ってない。調査地点5の合流地点は、構造は詳細把握出来ていない。調査地点3と4では、河床の状況が異なり、三面張りの箇所については、100%とは言えないが基本的に流出しないで流れる。4の河床のない箇所では、水圧、水量等によっては、湧き出てくることはあり得る。農道を流水する間にろ過効果は考えられる。
- 補足する。ダイオキシンは、疎水性が強い。ほとんどが土の粒子にくっついている。地下に入ると、粒子がろ過されて透明になり、地下水に浸透しない。クリーンセンターから排出されたダイオキシンが流出して、土壌に浸透しても、雨が降っても土壌は動かないので、基本的には、地下水には浸透せず、影響はない。一方、付着した土壌が雨で洗われて川に流入して、川の中を浮遊しながら流下することが懸念される。川の中へ流れ込んでくるのであれば、上流から順番に採取すれば、何処でダイオキシンが混入したか判断できるのでということで、ダイオキシンのサンプリング地点を選定し、調査をしている。- ・土壌への浸透、残留について、懸念をもっている。除染は可能なのか、また、除去するには具体的にどのような方法があるのか。

→旧センターの廃止の時は、表土を薄く削り取って搬出した。何故なら一旦、地面に落ちたものは地下水に浸透せずに土壌(粒子)に付着して残留するので、表面を薄く採るだけで、ほぼ、ほとんど除染は完了する。よって、地下に浸透するという事は、まずないと思われる。サンプリング地点を3カ点決めているのも、地下に浸透して出てくる水を調査することを想定していない。ある時に地面を泥水が流れて、その泥水、泥の成分の中にダイオキシンが含有していて、一緒に川に流入し、川で沈殿し、川床に堆積したり、そのまま、下流に流れていく。だから、川の堆積物の泥を分析したり、流れている水を分析したりして問題がないか、調査・チェックしている。よって、地下に浸透した水が問題を起こすということは想定し難い。

### 議事(4) 野洲市災害廃棄物処理計画(案)について

- ・どこが第一仮置場になるか、問題だと思うが、そこから委託業者が適宜、移送されるので集中することはないということか。ただ、災害ごみは、水銀、アスベスト等を含むごみも想定される。また、不法投棄の問題もあり、管理、統括については、市職員だけでは限界があると思う。市民の協力も必要かと考える。
- 2点あると思う。まず第1点は人員の部分、市役所だけでは当然、対応できないのは事実だ。こうした場合は、通常は、県等を通じて他市町村から応援を得る形をとる。わかりやすい例としては、消防、警察は、震災が発生した時、滋賀県警から、福島へ派遣されていた。当市職員も福島へ2名程度、派遣させていただいた。このような対応になろうかと思う。市民の方に分別の能力をあげていただくということは、良いことと思う。第一次仮置場での分別がきれいにできれば、当然、第二次仮置場もきれいに分別ができる。そのあたりに平常時における災害廃棄物の分別という形で、何らかの方法で生かせればと考えている。2点目の不法投棄については、現状も苦慮しているところである。これについては、引き続きパトロールないし監視という形で対応するしかないのか、と考えている。一番良いのは、監視カメラを設置して、見つけるという方法かと思う。災害時においても、同様の事が考えられるし、ごみについても有効な対策を検討していきたい。

以上